

西宮文学案内

第3回「涼宮ハルヒと村上春樹文学～西宮ゆかりの作品を解説する」

日時：2011年7月9日（土）14時から

場所：大手前大学 さくら夙川キャンパス

司会：本日はお暑いなか、水口ゼミナールの企画イベントにお越しいただきありがとうございます。本日の講演の司会を務めさせていただきます大手前大学メディア・芸術学部3回生ハヤシケンタロウと申します。よろしくお願いします。

講演に先立ちまして会場での注意事項を数点申し上げます。会場では周りのお客さまにご迷惑をおかけいたしますので、携帯電話やPHS機器の電源をお切りになりますようお願いいたします。また、喫煙等の行為も禁じられていますのでご協力をお願いいたします。

昨年から公益財団法人西宮市文化振興財団と共催で、西宮文化サロンの講座を大手前大学でも開催していました。昨年、西宮市と縁の深い人形浄瑠璃を知る「文楽への誘い」講座には、人形浄瑠璃文楽座の人形師を加えて講演と実演をしていただきました。

今年は西宮市とゆかりの文学作品に関して、西宮文学案内の講座が企画されました。大手前大学には、漫画アニメーション系と文芸系の学部がありますので、涼宮ハルヒと村上春樹文学の講演を選んでもらいました。

本日の講演、土居豊先生は1967年大阪に生まれました。大阪芸術大学文学部文芸学科を卒業し、2000年『村上春樹論』を連載により関西文学選奨奨励賞を受賞します。2005年音楽小説作品『トリオ・ソナタ』で小説家デビューをされます。作家小川国夫氏、文芸評論家川本三郎氏から、高い評価を受けておられます。評論『村上春樹のエロス』『坂の上の雲を読み解く』『涼宮ハルヒ論』など活躍されています。

まずは、西宮文学シリーズの企画者の夙川学院短期大学教授であられる河内厚郎先生からお話をいただきます。河内先生よろしくお願いします。

「あいさつ」夙川学院短期大学教授 河内 厚郎 先生

河内：お暑いなかお集まりいただきありがとうございます。

去年からこのシリーズを企画させていただいております。今回も大手前大学さんと水口先生のお力で、素敵な会場をいただきましてありがとうございます。この企画にぴったりな会場ではないかと思ってさっきから見ておりました。

このあいだ有川浩さんがお書きになった『阪急電車』がベストセラーになって映画化されました。

西宮市民もたくさんの方がエキストラで出演しましたが、大手前大学もたしか映画のな

かに出てきたと思います。多分この大学はそういうものに向いているのではないかと。ぜひこれからのそういう会場になってほしいと思って、いろいろ仕掛けていきたいと思います。

『阪急電車』に対抗するわけではありませんが、阪神電車が今年から「村上春樹のふるさと阪神沿線」というキャンペーンを世界的に始めるんだそうです。特に中国人観光客相手に始めるそうです。

中国では「村上春樹的」という言葉があって、これは固有名詞ではなく普通名詞なんです。 「ちょっとおしゃれな」というような意味なんです。村上春樹的阪神沿線というのはちょっとおしゃれな阪神沿線ということになりますが、阪神沿線が自分たちのことを「ちょっとおしゃれ」というのは多分初めてじゃないかと思います。だから、これは画期的なことが今度起こりそうな気がするんですね。阪急沿線はもちろんおしゃれだといっているんですが、阪神もそうなるということで、これはもう、西宮が大変なことになると思います。これからどんどんこういう場を仕掛けていきたいと思います。

これは入口であって、ここからいろんなインビテーションを得られて、いろんな企画に挑んだり、執筆されたり、どんどんしていただきたいと思います。できれば来年以降もこの企画を続けたいと思っております。秋はほかの大学のキャンパスを利用して、ミステリー作家の有栖川有栖さんをお招きします。例えば、阪神間とミステリーとかいろんなシリーズを続けていきたいと思っています。

今日はまず決定版の「涼宮ハルヒと村上春樹文学」ということで、じっくり堪能いただきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

司会：それでは、土居先生お願いします。

「涼宮ハルヒと村上春樹文学～西宮ゆかりの作品を解説する」

作家・文学レクチャー 土居 豊氏

皆さま、暑いなかようこそいらっしゃいました。途中、ちょっと倒れそうになったんじゃないですか、大丈夫でしょうか。幸いまだ大手前大学は節電 15 パーセントが到達していなかったようで、ひんやり涼しいなという感じですが。ざっと見渡したところ、会場の平均年齢が若干高めのような感じですので、熱中症にご注意いただいて、ぜひ水分補給をお願いしたいと思っています。

今日はずっと水口先生のゼミとタイアップするということで、この会場に学生さんもいらっしゃっているわけですね。大手前大学の学生さんはどのぐらいいらっしゃいますか。ちょっと手を挙げていただけますか。

けっこう、いらっしゃいますね。これは授業なので、べつに当てても構わないということで、ひょっとして当てるかもしれません。

操作のアシスタントをしてくださっている方がこの大学の卒業生の方で水口先生の教え子ということですが、ちょうど涼宮ハルヒの放映が始まったころにこの大学にいて、いわゆる聖地巡礼という作品舞台を探索して歩いた経験があるそうで、いよいよ涼宮ハルヒの地元へやってきたな、というような、そんな気がしています。

さて、先ほど始める前にスライドを上映させていただいていましたが、昨年の秋の、西宮文学案内の私の講演をお聴きいただいた方は、おそらく涼宮ハルヒのことはご存知だと思いますが、今回が初めてで、村上春樹は知っているが

涼宮ハルヒって何？

という方がひょっとしていらっしゃるかなと思って、最初にスライドを上映してざっとご紹介させていただきました。

これが先月発売になった最新刊『涼宮ハルヒの驚愕』というタイトルですが、前後2巻セットになっている作品で、発売してたちまちミリオンセラーになってしまいました。昨年、一昨年と社会現象となった村上春樹の『1Q84』の部数を抜いたとか抜かないとか、そのぐらい話題の作品になっています。タイトルが「涼宮ハルヒと村上春樹文学」ということで、最初はシンプルに「ハルヒと春樹」というようにいっていましたが、それではあんまりかなという感じがしましたので、もう少し分かりやすくタイトルを付けました。

「ハルヒと春樹」は、何か語呂がいいですね。つつい語呂合わせのように、「ハルヒと春樹」というようにテーマを口走っていますが、でも、これは意外なことですが、涼宮ハルヒの作品と村上春樹の作品を並べて論じた例、あるいは比べてみたという例は、これまでほとんどありません。ごく一部にこういう論評はありますが、ほとんどありません。

なぜ誰もそれをしないのかなと思って、私がこういうテーマで本を書きたいんですが、とあちこちに売り込みをしましたが、何かちょっと差し障りがあるみたいなんですね。

私も書く用意はできていながら、なかなか本にできないでいます。(※『ハルキとハルヒ～村上春樹と涼宮ハルヒを解説する』土居豊著 大学教育出版 2012年刊行予定)

いま画面に出していますのは『涼宮ハルヒの驚愕』、それから村上春樹の『海辺のカフカ』です。村上春樹の愛読者の方であれば、『海辺のカフカ』はおそらくお読みだろうと思います。このあたりをこの講座のなかでもちょっと話していきたいと思っています。

ある意味面白いのは、村上春樹の読者と涼宮ハルヒの原作の読者やアニメのファンの方が、重なるかどうかということは何となく微妙です。おそらく、大手前大学の学生さんであれば、多分、涼宮ハルヒは知っていると思います。試しに聞いてみますが、涼宮ハル

ヒを見たことがあるという方はいますか。

まさか、いない？

本当に？

正直に。涼宮ハルヒは見たことありませんか？

ありますよね？

テレビの放映はとっくに終わっていますが、昨年映画が上映されましたし、あまり大きな声では言えませんが、ユーチューブで見ようと思ったら見られるのでぜひご覧になってみてください。でもユーチューブで見ようと思ったら、よく削除されていますけれども。

話を進めようと思ったら自己紹介のページに飛んでしまいました。この左の方の写真はいきなり「終わり」と出ていますが、ここで終わりますという意味ではありません。昨年の秋の講演の様子をベイコムというケーブルテレビさんが放映してくださって、それを録画したものを画面に撮ったものです。いきなり「終わり」で申し訳ありませんが、私の経歴等はお手元のパンフレットをご覧ください。自己紹介が遅れましたが、私、文芸レクチャーの土居豊と申します。よろしく願いいたします。

文芸レクチャーというのは、いまのところ日本で私一人ですので、ぜひ覚えていただけたらと思います。文芸レクチャーと名乗っているのは、グーグルで検索してみても自分の名前しかヒットしないので、いまのところ私が唯一の文芸レクチャーということになります。

このあたりから本筋へ入っていきたいと思います。『涼宮ハルヒの驚愕』という新刊は今年の6月に出版しましたが、なんと前作が出てから4年もの間、作者は沈黙を保っておりまして、やっと出たわけです。一説には、発売予告といえば延期になり、また延期になりと伸び伸びになってやっぱり出ないのではないかとか、ファンの間では「出る出る詐欺」といわれて、やっぱり出ないだろうといわれていてやっと出ました。

これは本当に私の一人だけの考えですが、なぜなかなか出せなかったか。実は、村上春樹の『1Q84』がその間に出たんですね。前作の『涼宮ハルヒの分裂』は話が途中で終わっているんです。続きを早く読みたいのですが、この続編がなかなか出ないんです。実は、その間に村上春樹の『1Q84』が出版しましたが、ものすごく話の発想が似ているんです。どちらも世界が分裂する話で、二つの世界があるという話です。

村上春樹の愛読者の方であれば、世界が二つに分かれてどうこうという話は、村上春樹の定番ですよ。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』から始まり、『海辺のカフカ』もそうですし、『1Q84』もやっぱりそうです。村上春樹の得意とする並行世界の手

法ですが、涼宮ハルヒの方も、これはひょっとすると『1Q84』の完結を待ってから、あんまりかぶらないように結末を変えたのかなとかそんなこともちょっと思っています。

結末そのものは作者のインタビューによると、谷川流さん自身は最初から結末は決まっていたとおっしゃっているので、結末は決まっていたんだろうけれども、ひょっとしたら『1Q84』の第3部が出るのを待っていたのではないかと、そんな気がしています。そう思わせるぐらい、世界観というか描き方、ストーリーが非常に似ています。読み比べると非常に面白いのではないかと考えております。

画面は『1Q84』の本の写真を映しています。

右側にこっそり変な本が写っているのは実は私の本で、こっそりサブリミナル効果を狙っているわけです。

最近5月の下旬から6月の初めぐらいに、阪急電鉄梅田駅でエスカレーターに乗られた方がいらっしゃったら、このようなものをご覧になりませんでしたか。どこのエスカレーターかという、阪急電鉄梅田駅3階の改札へ続くエスカレーターが何本かありますが、一番端の方です。そちらのエスカレーターの壁面に全部涼宮ハルヒの新刊発売のキャンペーンポスターが並べてあって、ものすごく目を引いておりました。いまはそのあたりはハリー・ポッターが占領していますが、書店の本の宣伝も、力を入れているところはものすごく力を入れているなという感じですね。

このように涼宮ハルヒは非常に話題になり、よく読まれている小説であり、世界中に名前も知れ渡ったアニメーション作品でもあります。ちなみに涼宮ハルヒの通学と書いてあるのは、単なるおやじギャグなので気にしないでください。

これも先ほどお目にかきました『涼宮ハルヒの驚愕』ですね。上下にならんでいるのは前後編2冊ですが、左側にもう一つあるのが初回限定版で、特別付録の冊子が付いていて、それを一緒に並べました。初回限定版に特別冊子が付いているのは知っていたので、初回限定版を狙ってネット予約をしたわけです。ところが、ファンの中の情報で知ったんですが、西宮北口駅のアクタ西宮にあるジュンク堂書店西宮店では、『涼宮ハルヒの驚愕』の初回予約のお客さんに、ハルヒのロケマップやゆかりの喫茶店である珈琲屋ドリームのドリンク半額券を付けるとかという情報を聞いたので、しょうがないのもう1冊予約をして、いまのところ2冊あるわけです。

『産経新聞』が、よく分かりませんが、突然アニメの取材に力を入れ始めました。私はたまたま『産経新聞』を取っていたので、涼宮ハルヒがぼおんと紙面に登場している記事を目撃しています。

あるいは『けいおん!』というアニメがあります。『けいおん!』というアニメはものすごくファンが多くて、ブームになって社会現象化するようないろんなニュースが流れていますが、これもアニメ『けいおん!』の舞台ということで、京都の十字屋という楽器屋さんを特集した記事が出ていたりします。

なんと『けいおん!』の場合は、建築家のヴォーリズという方がつくった有名なヴォーリズ建築のなかの滋賀県にある豊郷小学校が、アニメをつくるときのロケ地になったんですね。ヴォーリズ建築の豊郷小学校を『けいおん!』のアニメのなかで高校の校舎に見立ててやっています。そのほか主人公たちが行き来する土地の背景は、京都郊外のいろんな風景を取り込んで描いているものですから、京都府や京都市が、がぜんこれは使えると思ったのか、去年の国税調査になぜか『けいおん!』が呼び掛けているキャンペーンの看板までつくってたりします。

だいたいビジネス雑誌というのは、世間で話題になっているものは絶対に見逃さないもので、ついこのあいだまでは、ビジネス雑誌はどれもこれも『もしドラ』ばかりでしたが、一時、『DIME』という雑誌のアニメ特集に『けいおん!』の付録が付いていたりしました。べつに私が『DIME』を買ったのは、この付録目当てに買ったのではありませんからね。ちゃんと『DIME』が読みたくて買ったんです。

そんな感じでブームになっているアニメ作品の筆頭に挙げられるのが、涼宮ハルヒではないかなと思っています。

画面が写真に変わりましたが、この山は、もちろん西宮市民であればご存知ですよ。べつに当てるつもりはありませんが。ご覧のようにこれは甲山ですね。西宮市の象徴である山、甲山です。

キャプションは「鶴屋山？」とクエスチョンマークを付けているのは、これは涼宮ハルヒの読者であれば、はは一んと思うところだろうと思いますが、涼宮ハルヒのなかに、どうも甲山とおぼしきこういう山が登場します。

このあたりを説明し出すと長くなるので簡単に済ませますが、鶴屋さんという土地の名士の娘がおりまして、主人公たちと同じ高校に通っています。昔からの土地持ちの鶴屋家というのは、山を持っているわけです。鶴屋家が所有している山は通称鶴屋山といわれているわけですが、そこに宝探しに行くエピソードがあります。それが『涼宮ハルヒの陰謀』という作品のなかに挙げられているエピソードです。

甲山が鶴屋山のモデルであろうということは、よく言われているところです。西宮のハルヒの舞台背景のなかで、もっともそれらしい山となると自然に甲山となるわけですが、鶴屋山に使われている甲山は、最初に種明かしをしてしまうと、実は涼宮ハルヒと村上春樹の作品をつなぐ一つの核になります。そうすると村上春樹の作品にも甲山がひょっとして出てきたかしらと、そんなことになってくるわけです。

まずは涼宮ハルヒの方から話をしていきます。この写真は、上ヶ原という境界がありますが、ちょうど上ヶ原中学あたりの歩道橋の上から甲山を撮ってみました。もうそこに答えを書いてしまっているのを忘れていました。

ハルヒの鶴屋山は春樹のお椀山か？

とか書いていますね。

つまり村上春樹の『海辺のカフカ』に出てくるお椀山というのがあるんですね。ナカタさんという不思議な老人が、幼いころに超常現象みたいなことに遭って、おかしいことになってしまう場面で、子どもたちがピクニックに行く山がお椀山といいます。あれがおそらく甲山がモデルではないかとよくいわれております。

涼宮ハルヒのなかに出てくる鶴屋山、そして『海辺のカフカ』に出てくるお椀山、どちらも甲山をモデルにしているとすれば、涼宮ハルヒの作品の世界と村上春樹の小説の世界が、そこで不思議なことにリンクするということになります。そんなことをいろいろ考えると、ちょっと作品の読み方も変わってくるわけです。

話を戻しますが、上ヶ原中学があるこのあたりは、涼宮ハルヒの作品のアニメの背景にあちこちロケされた場所です。

そういうわけでこのへんから見てみたわけです。ちなみに上ヶ原中学は、原作者の谷川流さんの母校かもしれないといわれています。

こういう景色をずっと見て育った谷川流さんですが、ここで話はそろそろ核心に入りたいと思います。

今回、涼宮ハルヒを語るときに、常に僕の頭には3月11日の東日本大震災があります。まだまだ収束していませんし、事態はどんどん進んでいるわけですが、あの震災以来、特にアニメや漫画、小説などエンターテインメントの世界を語るときに、常に何かある種の後ろめたさがあります。そういうことは、ほかの評論家の方も何人か口にしておられますが、震災のあとに、日常的な楽しい時間を描いたこういうアニメや小説を語るのはどうということなんだろうと、そういう複雑な思いが若干あるわけです。

僕には、小学校低学年の息子がいるのですが、当初、東日本大震災の津波や原発事故の映像を見ながら、ちらっと息子が言ったんです。

ポケモンの世界だったら、地震も津波も止められるんやけれどなあと。ちょうど息子はDSでポケモンのゲームにはまっているところで、ついぼろっとそういうことを思ったんでしょうね。

ポケモンの世界をご存知でしょうか。

ポケモンというキャラクターがいて、ゲームやアニメがあるんですが、小さいお子さんが身近にいらっしゃったら、多分お家にピカチュウの1個や2個は転がっているんじゃないかと思いますが。

ポケモンの世界であれば、地震を止めるやつもいますし、津波を止められる水ポケモンというのもあるらしいんです。そういうことを息子がぼろっと言って、それが何か妙に心に

引っ掛かっていたんです。

そういう引っ掛かりを覚えながら最新刊の『涼宮ハルヒの驚愕』を読んだり、村上春樹の作品を読み返したりしているうちに、ふと気付いたんです。前に写真を出していますが、上ヶ原一带の風景です。ふと気になったんですが、谷川流さんは年齢的に私よりちょっと下ぐらいで、阪神・淡路大震災を経験されているんです。

よく考えてみると涼宮ハルヒという作品は、西宮を中心に阪神間を舞台に描いた作品ですが、震災の跡や震災を思わせるようなものはほとんど出てこないんです。まるでなかったかのように描かれているんです。

ちなみに涼宮ハルヒという主人公の女の子は高校生で、番組が始まったところでは、高校に入学したばかりの1年生です。このあたりから、だんだん空想の世界に入っていきますが、涼宮ハルヒが最初に書かれたのは2003年のことで、同年にスニーカー大賞を受賞して谷川流さんが華々しくデビューされます。2003年に最初に書かれた涼宮ハルヒは、その時点で高校1年生であれば、ざっと逆算すると、涼宮ハルヒが5歳のときに阪神・淡路大震災が起こっていることとなります。涼宮ハルヒが西宮か阪神間のどこかに住んでいると仮定すると、5歳のときに阪神・淡路大震災を経験しているわけです。幼い年齢ではあるけれども、何か記憶にはおそらく残っているはずだとかいろいろ考え始めたんです。

『涼宮ハルヒの憂鬱』という作品に描かれた西宮や阪神間の風景は、ひょっとすると阪神・淡路大震災はなかったんじゃないかと思います。これは谷川流さんがどう考えたかは分かりません。

実は谷川流さんにインタビューを申し込んでいますが、なかなか表に出たがらない作家さんで、角川を通じてインタビューを申し込んでも無理と言われてしまいましたので、なかなかインタビューは実現していないんですが、もしお会いすることができたら、聞いてみたいです。涼宮ハルヒの世界では、阪神・淡路大震災はひょっとするとなかったんじゃないですかということを知りたいですね。

なぜそういうことになるかという、『涼宮ハルヒの憂鬱』の作品をご存知の方はお分かりだと思いますが、涼宮ハルヒという女の子は不思議な能力を持っているんです。不思議な能力というかほとんど女神さまみたいな力を持っていて、世界をつくり変えてしまったという設定になっています。涼宮ハルヒが高校1年生の物語が始まる3年前に何かが起こって、涼宮ハルヒが世界を全部新しくつくり変えてしまったんだという一種のSF小説としての設定で話は始まっています。

そこで、はたと思い至ったわけです。もし涼宮ハルヒが世界をつくり変えたとしますよね。5歳のときに阪神・淡路大震災を経験しているとします。もし自分が阪神・淡路大震災を経験して、世界をつくり変える力を突然得たとします。ひょっとして涼宮ハルヒは、世界をつくり変えるときに、無意識のうちに震災をなかったことにしちゃったんじゃないかしら。そんな妄想を私が抱いたわけです。

ちなみに、その写真はロケ地の涼宮ハルヒの聖地巡礼によく出てくる場所です。いくつ

か写真を見ていきましょう。原作者谷川流さんに直接のインタビューは断られてしまいましたので、しょうがないので周辺から攻めてやろうと考えていたときに、たまたま僕の友人の一人が西宮北高校出身であることをある日ぼろっと知ったんです。本人は全然そんなことは言いませんが、谷川流さんのわりと知り合いに当たる人だったということで、もっと早く言えよおまえという感じですが、向こうはそんなことは意識していなかったらしく、たまたま知ってそこを手掛かりにして、西宮北高校の谷川流さん周辺の親しい人に取材を申し入れましたところ、快く受けていただきました。

その方にご案内していただいてあちこち回ったわけです。そういうわけで上ヶ原中学のグラウンドを脇道から写真を撮りました。このグラウンドは、小説のなかでは、涼宮ハルヒが中学1年生のときに、グラウンドに忍び込んで不思議な地上絵を描いたといわれている場所です。

もう一つ大きな舞台として、西宮北口の駅周辺が出てきます。西宮北口の駅周辺は、ご存知でしょうか、最近、駅前ロータリーの広場が工事で変わって、前の駅前広場がなくなってしまいました。これは西宮北口駅の西宮ガーデンズ側ではなくて、アクタ西宮側の広場です。分かりますでしょうか、アクタ西宮側と西宮ガーデンズ側、だいたい大きく分けてそうなります。

左の写真にありますように、これは西宮北口の駅前広場のいまの姿です。前の広場だったときに、アニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』のスタッフがここをロケして、アニメのなかに、いまとなつては懐かしい前の西宮北口の駅前広場が何度も何度も登場します。主人公たちの待ち合わせ場所になっていますね。これは、先ほど言いました涼宮ハルヒのなかに出てくる喫茶店です。この喫茶店もほとんどそのまま描かれています。この喫茶店のなかに涼宮ハルヒたちがたむろして、何度も何度もいろんな相談をするという、そんなふうに描かれたお店です。

ただ、この珈琲屋ドリームは古くからある喫茶店で、西宮在住の方はよくご存知だと思いますが、駅のロータリーに面していなくて一筋奥です。商店街の筋でいうと、ちょうど十字になっている線路側の筋です。ただ、アニメの場合は、ロータリーに面しているような感じにちょっとデフォルメされて描かれています。このような感じで、西宮周辺の風景が涼宮ハルヒのなかではちょっとずつ変えられて出てきます。

この左の地図が、例のジュンク堂書店西宮店が特典として付けたロケ地マップで、結構詳しくできております。これが一つあれば、この場所で撮影されたとか、あの場所はこの場所だったみたいなことがすぐ分かるようになっています。この地図をゲットするために、『涼宮ハルヒの驚愕』をもう1冊買う羽目になったわけですが、2冊あっても、今度谷川さんに会えたとしたら、2冊買いましたのでサインしてもらおうかなと思っているわけです。しかも2冊といっても、『涼宮ハルヒの驚愕』は2巻セットなので両方に書いてねとしようもないことを考えています。

右の方の川は、津門川（つとがわ）と読みます。ちょっと難しい読み方ですね。津門川

は、写真では分かりにくいですが、ちょっと用水路に毛が生えた程度の細い川です。

『涼宮ハルヒの憂鬱』のなかで、駅前の不思議なものを探索する任務をみんなでやるという話があるんですが、そのなかに西宮北口の駅前広場に集合して、先ほどの喫茶店で相談して、そこから二手に分かれて不思議なものを探しに行くわけです。一方のキョン君とみくるちゃんが祝川（実は夙川）の河川敷を二人で歩いているところへぼんと飛ぶわけです。どういうことかということ、作品のなかでは西宮北口の駅前で集まって、そこから歩いて夙川の河原へ散歩に行っているわけです。これはどう考えても距離的に無理なので、あの作品のなかでは夙川の河原は、西宮北口の駅とわりと近くにあることになっています。デフォルメされているわけです。

位置的には、先ほどの珈琲屋ドリームから道を真っすぐ歩いて2分、3分で着く場所に津門川があります。この津門川というのは、ルミナリエみたいなイルミネーションをしたり、鯉のぼりを出していたり、わりといろいろ商店街の方がやっているのでしょうか、結構いろいろきれいにしている川です。ひょっとしたら、ここに津門川があるので、じゃあこれを夙川に変えてしまおうとそんな作者の楽しんでいる様子が、何となく目に浮かぶなあと思います。

「津門川が実は祝川だ」

と僕は勝手に考えています。現実の津門川は、河原を散歩できるような川ではないので、これを夙川にしちゃったのかなとそんなことを考えています。

「改変された西宮」と書きましたが、世界をつくり変えるときに、西宮を涼宮ハルヒの望むように変えてしまった姿がアニメのなかに、あるいは原作本のなかに描かれている西宮かなと考えています。

写真はまた西宮北口の駅前に戻ってきましたが、実際には現実の風景はどんどん変わっていきますよね。もちろん阪神・淡路大震災の前と後では、西宮市のなかの風景もずいぶん変わりました。阪神間も神戸もずいぶん風景が変わりました。現実にもそうやって変わっていくものですが、アニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』のなかに描かれたあの時点の西宮の風景は、実際に駅前が変わってしまっていますが、少なくともアニメのなかに永遠に保存された風景だなと考えています。

これが作品の舞台になっている西宮北高校の航空写真です。学校のホームページから勝手に拝借しました。北高と呼ばれていて、涼宮ハルヒの通う高校でもあり、作者の母校でもあります。だいたい西宮の北の方にあって、ずいぶん山の上の方に登らなければなりません。

さて、『涼宮ハルヒの憂鬱』のなかで、ものすごくポイントになるような場所が何か所か描かれています。そのなかの一つに、ちょっと見にくいですが文芸部室が出てきます。これは西宮北高校の部室の一つです。ちょっと古い校舎がまだ残っていて、その古い校舎の

一角という設定になっています。

『涼宮ハルヒの観測』というタイトルで、本編ではなくていろんなエピソード集や解説、作者のインタビューや座談などファンのためにまとめた1冊がありますが、この『涼宮ハルヒの観測』のなかの谷川流さんのインタビューを読みました。自分がインタビューできないのしょうがないからこれを読みました、これを読みますと、ちょっとねたばらしをしてくれているのでうれしいです。

前に書きましたように、作者の谷川流さんといえば、西宮北高校の出身だということは知れ渡っています。読者やファンのなかには知れ渡っているわけです。だから、西宮北高校に聖地巡礼に行くということがはやっているわけです。そして、学校の方では、ちゃんとホームページに断り書きも出していて、外から撮影される分には差支えないですが、中には入らないでくださいと、わりと好意的に対応をしています。

少し脱線しますが、村上春樹の出身校である芦屋市立精道中学校にちょっと行ったことがあります。村上春樹の作品の解説をする資料にと思って精道中学校の写真を撮りに行きましたが、最近の中学校は警戒が厳重で、ちゃんと警備員さんがいるわけです。近づいて正門あたりの写真を撮っていると、警備員さんがだだだだ近づいてくるので、一瞬ちゅうちょしましたが、逃げるにしかずと思ってそのときは一目散に逃げましたけれども。もちろん説明してもよかったです、ちょっと怪しまれても嫌だしなと思って、そのときはあんまりちゃんとした格好をしていなかったのも盗撮魔と勘違いされたいけないので逃げました。

西宮北高校の場合は、中に入らなければ撮影してもいいよということですので、わりと好意的です。このなかを書いてあったのは、作者の谷川流さんは西宮北高校を出て、関西学院大学に行っているんですね。

普通だったら、作家の紹介をするときに、最終学歴をいうじゃないですか。谷川流、関西学院大学卒の作家ということになるんですが、あんまりそのイメージでは語られていないところが面白いですね。谷川流さんは西宮市在住で、涼宮ハルヒの作者で、作品に描かれた西宮北高校の出身であるということまではよく語られています、関西学院大学出身だということは、あまりまだいわれていないんじゃないかと思います。

関西学院大学時代に美術部のクラブハウスでどんちゃん騒ぎして、みんなで鍋とかをやって徹夜で騒いでとか楽しい思い出話は先ほどのインタビューのなかに出てきて、ははんと誰しも思うわけです。インタビューアもちゃんとそのへんを突っ込んで、これが涼宮ハルヒの作品のなかの部室の鍋パーティーとつながっているんですかという感じで、作者もそのへんは否定していません。関西学院大学時代のわりと楽しいキャンパスライフが涼宮ハルヒの作品のイメージに、結構ストレートに反映しているところもあるみたいです。

だから、SOS 団の象徴的に描かれる部室が、これが作者の描きたい青春の一つの象徴ではないのかなとこのあたりは思うわけです。それが西宮北高校の文芸部室であったかもしれないし、あるいは関西学院大学のクラブハウスを西宮北高校に置き換えたのかもしれない

いし、そのあたりはこれから調べていきたいなと思うところです。

ちなみに、これは『涼宮ハルヒの消失』という映画化されたものの原作で、びらびらとポストイットを付けて、いろいろ準備していたんですが。また脱線しますが、ポストイットを僕がべたべた張っていると、下の子どもがまだ4歳なので、はがしてしまうんですね。シールを張って遊んでいると思っているらしくて、勝手にはがしてしまうんです。逆にポストイットがないなと思うと、あっちの方で張ってあったりします。子どもにしたら面白いかもしれませんね。

『涼宮ハルヒの消失』のあとがきのなかには、わりと谷川さんの青春の思い出みたいなものが語られています。そのなかに、西宮北高校時代の文芸部室のことも書かれています。先輩の女子生徒のことや結構作品のモデルになったようなコアな部分が語られていますが、どうやら事実に近いらしいです。

文芸部室というのは谷川流さんのなかでは、大きな存在だったんだということが分かるわけです。

先ほどから涼宮ハルヒと西宮の話ばかりしていますが、このごろはいろんな作品のロケ地というのが、わりと市民権を得てきました。ロケ地巡りが観光コースになったり、イベントになったり、宣伝のポスターになったりします。

映画『阪急電車』、

それからこのあいだ上映しておりました大阪を舞台にした

映画『プリンセスヨトミ』、

ちょっと首をひねる部分もありましたが、いろんなかたちでロケ地めぐりが話題になりつつあります。

阪神間もいろんなロケ地がありますが、大阪の映画でもっとも大阪を美しく撮った映画といえば、僕は昔松田優作が世界的に有名になったきっかけの映画でもあるリドリー・スコット監督の映画『ブラックレイン』だと思います。大阪ロケをあちこちしておりました。いま出しておりますが、ものすごく斬新な映像で、いまはもうない阪急百貨店のコンコースですが、取り壊したのは阪急電鉄の一生の不覚ではないかと勝手に思っています。あれを壊すことはなかったと思います。非常に斬新な映像に撮られていました。夙川のあたりもいろんなかたちで描かれています。

さて、このあたりで夙川が谷川流と村上春樹を結びつける一つのカギになる、先ほどの甲山と並んで夙川がカギになる場所かもしれないということを勝手に書いているわけですが、このへんで音楽をご紹介しますと思います。よろしいでしょうか。まず3種類の音楽をかけてみたいと思います。

(音楽)

曲名：ラヴェル作曲『ダフニスとクロエ』

演奏：デュトワ指揮 モントリオール交響楽団

なぜこんな曲をかけているかという、これは涼宮ハルヒのアニメのなかで BGM に使われたクラシックの曲です。これはクラシックの名曲で、ラヴェルの『ダフニスとクロエ』ですが、アニメのなかでこういう曲をバックで使っているのですが、そういうところがアニメシリーズ涼宮ハルヒの魅力、一つの楽しみでもあります。

これはフェードアウトしていただいて、次の2曲目にいきます。

(音楽)

曲名：チャイコフスキー作曲『交響曲第4番』

演奏：小澤征爾指揮 サイトウキネン・オーケストラ

これも涼宮ハルヒのなかに BGM として使われています。これはチャイコフスキーの『交響曲第4番』です。さりげなくクラシックの名曲を BGM に散りばめるあたりに、なかなかスタッフの遊び心みたいなものが出ていますね。これはフェードアウトします。

このようなクラシックの曲の使い方というのは、涼宮ハルヒのアニメの場合は非常にうまい使い方をしているなど、クラシックも大好きな私にとってはすごく楽しいのですが、一方、村上春樹の小説を読むときの楽しさの一つは、いろんなねたを散りばめてあるところです。次の3曲目をおかけします。

(音楽)

曲名：ベートーベン作曲『ピアノ三重奏曲第7番 「大公」』

演奏：アルトゥール・ルービンシュタイン(ピアノ)、ヤッシャ・ハイフェッツ(ヴァイオリン)、エマニュエル・フオイアマン(チェロ)

これは村上春樹の何の曲かお分かりでしょうか、ベートーベンの『大公トリオ』です。有名なトリオ曲ですが、『海辺のカフカ』のなかに、中日ドラゴンズファンでアロハシャツが大好きな星野さんという人がいまして、名曲喫茶でこれを聴いて、ものすごくはまってしまうわけです。

このように、村上春樹の小説のなかに散りばめられたいろんな曲のねたというのは、結構マニアックで、そういうものをたどっていくとなかなか面白いですね。

ちなみに『海辺のカフカ』が発売されたとき、小説のなかにベートーベンの『大公トリオ』というトリオ曲があるということで、CD屋さんが『海辺のカフカ』とセットにして店

頭に置いたりしました。いま思えば、それがあって一昨年『1Q84』が発売されたときに、また『1Q84』のなかに出てくる『シンフォニエッタ』という曲のCDをCD屋さんが『1Q84』の本とセットにして売ると。そんなことにつながっていきました。つまり、村上春樹の小説と登場する音楽がセットになっていくような、そういうことがこのごろよくあるわけですね。

谷川流の小説の涼宮ハルヒのシリーズのなかにも、たくさん音楽の引用が出てきますが、音楽だけではなくて、映画の引用もよく出てきます。そういった作風、作り方は、村上春樹と結構共通するところがあるなと思っています。

いま前に出しているのは夙川の風景です。これはアニメ製作スタッフの方で考えているんでしょうが、映画『涼宮ハルヒの消失』の場面のなかに出てくる長門有希さんが読んでいる本が、村上春樹の『世界の終りとハードボイル・ワンダーランド』とか、隠しねたがぼろっとあって、この二人をリンクさせるカギが結構あるわけです。

さて、そのあたりで話が村上春樹の方へシフトします。これは写真がぼやけていて申し訳ありませんが、突然、眼鏡の度が合わなくなったような感じですが、さくら夙川駅のホームからちょうど甲山が見えるので、携帯電話のカメラで撮ったのでぼやけてしまいました。

少し大学の講義らしくご質問したいのですが、『海辺のカフカ』を読むとお椀山というのが出てきます。お椀山というのは、最初に言いましたように、ナカタ老人が子どものころに超常現象に遭って不思議な魔力を身に付ける代わりにちょっとぼけてしまうということがあった山です。

あのお椀山が甲山じゃないかと思った方はいらっしゃいますか？

この会場で、お椀山は甲山ではないのと一瞬読んで感じた方はいらっしゃいますか？

あ、いない？

どうでしょう。

実は、これは甲山が『海辺のカフカ』のお椀山だということは、どこにも書かれていないわけです。しかもお椀山というのは、べつに阪神間にあるわけじゃないんです。『海辺のカフカ』のなかでは、山梨県にある山なんです。山梨県にあって、小学校の子どもがよくピクニックに連れていってもらう山。お椀のような形をした山です。

でもお椀山といえば、やっぱり甲山のイメージがあるんじゃないかという説があるんです。べつに村上春樹がそんなことを言っているわけではないし、作品のなかでもべつに西宮にあると書いていないわけです。でも、これは甲山のイメージではないのかなと唱える

説があるわけです。

ちょっと何となくそうは言えなくなってきたかもしれませんが、『海辺のカフカ』を読んで、これが甲山のイメージじゃないかと思う人が、案外少ないのかもしれませんがね。そのあたりが今後の課題かもしれません。

でも、いかにもお椀みたいな形をした山を村上春樹が描くときに、甲山をイメージしてもおかしくはないわけですね。なにせ村上春樹は子どものころは西宮在住でしたし、甲山は見慣れていたでしょうから、そういう原風景というものが作家にはありますから。山梨県に場所を設定しましたが、描写のイメージは甲山のイメージで描いたかもしれませんね。

こういうことは言ったもの勝ちだと思いますね。これは最初にごあいさつなさった河内厚郎さんのおほこですが、言ったもの勝ちなんです。僕も影響されてだんだん使うようになりました。これは言ったもの勝ちで、ある日山梨県が『海辺のカフカ』のお椀山観光コースとか言い出すかもしれませんね。それはタイミングとしてはおそらく村上春樹がノーベル文学賞を取ったときに、ニュースになって当然話題になりますね。『海辺のカフカ』のなかに出てきたお椀山のモデルはこれだみたいなことを、山梨県の観光の人が言い出さないとも限らないですね。なんせ作品のなかには山梨県と書いてありますから。

その証拠に『海辺のカフカ』のなかに出てくる四国の高松の図書館のモデルはこれだ、みたいなことを、すでに四国の方でいわれていますよね。『朝日新聞』かどこかの新聞に載っていましたが、このごろモデル探しというのは、ずいぶん村上春樹の作品では盛んに行われています。作者もそのことを当然分かっているんで、これがモデルですとかいうことは口が裂けても言わないんです。べつにモデルはないとか言いますが、読者の側で勝手にモデルを決めて、決めたもの勝ちです。そんなふうに西宮がお椀山をもし放棄するとすれば、当然山梨県が名乗りを上げるかもしれません。そんな感じになるわけです。

さて、阪神間の共通する作品の舞台はいくつもあります。それが村上春樹のなかにはたくさん登場しますし、谷川流の涼宮ハルヒに描かれた阪神間もやっぱりそうです。いかにも阪神間らしいというのは、やっぱり学生の姿でしょう。

いま出しているのは、神戸女学院の講堂の写真です。特に宝塚線から今津線、神戸線の界限というのは、学校、大学がたくさんあるので、昼間、阪急電車に乗るのに時間帯を間違えると学生でめちゃくちゃ混んでいて

「しまった」

ということになります。いかにも阪神間らしい学生の雰囲気があります。一つ例を挙げると、涼宮ハルヒのなかで描かれた高校生たちは、期末テストのあとに休みがあるらしいんです。これはどうですか。いわゆるテスト休みというのがあるらしいんです。これは実はどこでもあるわけではなくて、大阪とか関西の高校でテスト休みが結構あります。このごろでは、結構、テスト休み中も授業を入れないと単位が足りないとかで、

テスト休みがなくなりつつありますが。テスト休みがあるというのは、言ってみれば、あまっちゃよろいとか、「なぜテストが終って休みになるの？」みたいな、がんがん勉強させている地方の高校にしてみたら、そんなことはあり得ないことで、要するに、テスト休みみたいなまったりしたノリはいかにも阪神間らしいなと私なんかは思うわけです。

このへんから話をまとめていきますが、これは阪神・淡路大震災で破壊された神戸港の岸壁を保存してある震災メモリアルパークで、メリケンパークにあります。村上春樹の阪神間の風景は、実は、いまの阪神間の風景ではありません。それは多分お分かりだと思います。

村上春樹の初期の作品『風の歌を聴け』とか『1973年のピンボール』、そして『羊をめぐる冒険』。これらの作品には非常にたくさん阪神間の風景が描かれていますが、あれは当然のことながら、阪神・淡路大震災以前の村上春樹が阪神間に在住だった当時のイメージで書かれています。

『風の歌を聴け』を映画化した大森一樹監督の映画も、やっぱり古い阪神・淡路大震災以前の阪神間、神戸の姿を映像に残っていて、そういう意味でいうと貴重なフィルムになると思います。震災以前の映像なんです。

村上春樹の描いた阪神間の風景は、実はかなり失われてしまっているわけです。神戸そのものもやはり違いますね。それは僕自身が10代のころから神戸あたりを徘徊していたので分かりますが、やっぱり昔の神戸といまの神戸はだいぶ違いますね。変わりましたね。西宮だってそうですね。そういうふうには村上春樹が描いた阪神間の風景というのは、いまはもうかなり失われてしまっていることがまず前提としてあります。

これは有名な芦屋の浜風町のマンションです。これは『羊をめぐる冒険』のなかに登場する風景として有名ですが、そのもとになっている『五月の海岸線』という短編がありまして、そのなかにも印象的に描かれています。

「巨大な火葬場のような」

という描写が、つまり村上春樹がその阪神・淡路大震災を予言したとよく取り上げられるところですが、失われた風景です。

これはまだ貴重な残された風景だと思います。ちょうどいまの浜風町が見えるところの反対側になります。海水浴場の風景、これは西宮市側です。『ノルウェイの森』のなかで、直子さんが入院してキズキくんとワタナベくんがバイクに乗ってお見舞いに行くというシーンがありまして、そのときに描かれたのは、その海水浴場ではないかなといわれていたりします。貴重な残された風景であると思います。

これは摩耶山の山上から、神戸、阪神間、そして大阪湾をずっと展望したときの写真です。いま言いましたように、村上春樹の初期の作品のなかに描かれている阪神間の風景は、もちろん魅力的な作品のなかの描写になっていますが、『海辺のカフカ』は2000年代に入

ってからの作品で、描かれている時代も 2000 年前後になります。

実は『海辺のカフカ』に神戸が登場しますね。これは覚えていらっしゃるでしょうか。『海辺のカフカ』といえば、四国のことばかり言われますが、実は『海辺のカフカ』のなかに神戸が描かれているんです。

それは、ナカタさんが四国へヒッチハイクをして移動していくわけですが、たまたまトラックの運転手である星野さんが、ナカタさんをヒッチハイクさせてあげてトラックの席に乗せて神戸まで来るんです。トラックで神戸の百貨店に品物を運ぶために、星野さんはトラックで神戸までやってきました。ナカタさんもそれに便乗して、ヒッチハイクでやって来ました。

そのときに、神戸の風景とか運転手さんとか肉体労働系の人たちが朝ごはんを食べている安くてうまい定食屋とか出てきたりします。神戸の場面がありますが、何か読むと描かれている場所が、初期 3 部作のなかで描かれた阪神間の場所とはちょっと違うんですね。港の周辺のわりと雑然とした、どちらかというところを描いています。わりとあっさりとして、そのあとナカタさんと星野さんは、バスに乗って明石海峡大橋を渡って四国に行くわけです。

そうすると神戸はほとんど素通りされてしまっているわけですが、『海辺のカフカ』のなかで神戸を描いているけれど、村上春樹の描き方というのは、なんとなく阪神間の自分の育った場所を愛情込めて描くみたいなそういう感じではありません。ちょっと避けているなというそんな雰囲気があります。何となく描きにくいという感じがあったのかなという気がします。それは読んだ印象です。

実際、神戸を描く必然性も何となくないような気がします。要するに神戸でなくてもよかったような気がするんです。トラックの荷下ろしをするだけだから、神戸は集積地なのはもちろん分かっていますが、べつに神戸でなくてもよかったのに。あえて神戸を選んでいるんだけど、ちょっと屈折した感じですか。

失われた阪神間の風景ということで、いくつか写真を用意しました。これは岡本あたりの六甲山の風景です。谷崎潤一郎ゆかりの鎖瀾閣というものがあって、震災で崩壊したのを復元するという話があったんですが、いまのところ頓挫して、復元できないままのようです。一度失われてしまうと、なかなか元通りになるのは難しいです。

岡本近辺をうろうろしたときに撮った風景ですが、「阪神間の独特の落ち着いた住宅街」という決まり文句がありますが、実は建て直された風景の方が、このごろ多いのではないかという気がします。阪神間独特の落ち着いた住宅街のように見えているけれど、実は震災のあと建て直された住宅街がこのごろ目立つんじゃないかなという気がします。

これは特に必然性はありませんが、思わずここに入れてしまいました。この全裸でトラックペットを吹いているこの銅像を結構気に入っています。どなたかアニメの背景に使ってくれないかなと思っています。

芦屋の山手の風景も、村上春樹が『風の歌を聴け』のなかに描いた魅力的な芦屋の風景

だと思っただけ見ることはもちろんできるんですが、やっぱりどんどん建て替えられていきますね。震災の被害はもちろんですし、芦屋のまちなみもずいぶん村上春樹が描いたころとは変わっていったのではないかと思います。

そんなふうに村上春樹の作品の雰囲気を感じながら阪神間を歩いているつもりでいて、実は違う風景のなかを歩いているのかもしれない。そういうのも案外考えてみると、失われた風景というのは、小説のなかにしか、あるいは人の心の中にしか風景はないということもできると思います。それが涼宮ハルヒの失われた風景ということになっています。

これは神戸の古いビルの一つで、神戸朝日ビルで、いまは映画館が入っています。こんな古い昔のビルの地下に映画館があって、ここの映画館でアニメ『エヴァンゲリオン』をやっているという面白いシチュエーションもあります。

変わっていくといえば、阪神間から離れますが、大阪駅の風景が最近ものすごい勢いで変わっていていますよね。華々しく新駅ビルがオープンして、大阪駅もまるで別物のようになり変りました。大阪の風景もふと気がつくといくつと変わっていき、先ほどの阪急百貨店のコンコースもいまは見られなくなりましたね。映画『ブラックレイン』は大阪でロケされたわけですが、ロケ地を見ようと思ってももう見られないですね。もったいないことをしたような気もしますが、そんなことをいまさら言ってみてもしょうがありません。

この大阪駅周辺の風景は、涼宮ハルヒのなかにも出てきます。説明しだすと長いので端折りますが、閉鎖空間という謎の異次元空間みたいなものが出現して、そこへ巨大なよく分からない神人という怪物が出てきて、ビルを片っ端から壊すわけですね。そのアニメで描かれている大阪の駅前の風景も、いつの間にか変わってきつつありますね。

これは、HEP ファイブの観覧車から大阪の風景を見たときの写真です。保存運動が起こっていたけれど、その後どうなったんやろうなと思っていますが、大阪中央郵便局も歴史的建造物だということで、保存すべきだといわれていますが、何しろ駅前の超一等地にそのままになっているのでどうするのかなと思います。

僕なんかは、新駅ビルをあのように華々しくつくるのはいいのですが、すぐそばにある歴史的建造物をうまく使って新旧うまく並べて使えば、大阪の歴史を深いところまで感じることができるのではないかなと思ったりもするんですが、何となく、あっけなく取り壊されることになりそうな予感を感じます。

ちなみに、観覧車の中からそこをのぞいている坊やは、先ほどのポケモンにはまっているうちの息子ですが、いろいろ梅田の風景も変わっていくだろうなということです。

『海辺のカフカ』のなかに出てきました謎のジョニー・ウォーカーさんという人がいましたね。それからカーネル・サンダーズが出てきたりしますね。あのへんは、村上春樹の読者の好みに分かれるところです。

もしこのなかで村上春樹の本をまだ読んでなくてどれを読んだらいいですかという場合に、僕は間違っても『海辺のカフカ』や『1Q84』はちょっと薦めない方がいいだろう

うと思います。なぜかという小説の好みというものがあるので、いきなりジョニー・ウォーカーとかカーネル・サンダーズが出てくる時点で付いていけないということがあるかもしれません。

『1Q84』に至っては、必殺仕事人じゃあるまいし、針を刺してうまいこと、痕跡を残さず殺すのよ、なんやねんみたいなことになってしまうといけけないので、最近の作品を真っ先に読むのはお薦めできませんね。もう少しとつきやすいところから入る方が無難ではないかなと思います。

『ノルウェイの森』なんかは、一応書き方はリアリズムで書かれているので抵抗なく読めるとは思います。でも『ノルウェイの森』を読んで村上春樹が好きになるかという、それはまたちょっと違うかもしれないと思ったりもします。

初期の作品か、あるいはいきなり『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を読むという究極の選択もあります。ちょっと読みやすいところで、『ダンス・ダンス・ダンス』なんかは、続けて読むほうが分かりやすいですが、結構普通に読めるし、わりと読みやすいし、それでいて村上春樹っぽいところがすごく出ていると思います。

それでは、話は最後のまとめにかかりますが、『海辺のカフカ』のカフカ少年は家出をして東京から四国へ行きます。どこでもいいけど、とにかく南へ行こうということで、家出をします。南へ行くと服装に困らないし、寒くない方がいいから南へ行くといいこと。あまり大きなまちではない方がいいということで、結局、大阪、神戸あたりは素通りされてしまって四国へ行くわけです。

一瞬思ったのは、カフカ少年が奈良へ行ってもよかったのになと思ったりもしました。村上春樹と奈良というのは、ほとんど関係なさそうに思えますよね。ちなみに左の写真は見にくいのですが、天井からせんたくんがいっぱいぶら下がっていて、ものすごくキャンペーンをやっていたときです。奈良は村上春樹のなかでぼんと、なぜか出てくるところがあるんです。村上春樹と奈良のつながりは、意外な盲点ではないかと思ったりもします。

そんなふうには村上春樹がらみでいろいろと作品と土地の関係は、いくらでも掘り起こそうと思えば、掘り起こすことができます。西宮としても、あまりうかうかとはしてられないんじゃないかなということも思っています。

西宮は、芦屋に引っ越すまで村上春樹が育った土地ですが、実際に西宮の風景が作品のなかに出てくるのは案外少なかったりします。だから、西宮の生んだ村上春樹ということを出したいのであれば、やっぱりそんなにまだねたが取られないうちにどんどん、甲山も山梨県に取られないうちにゲットしておいた方がいいと思います。

これは明石海峡大橋です。明石海峡大橋を渡らずにカフカ少年は瀬戸大橋まわりで四国へ上陸してしまいます。まるで、神戸あたりを避けるかのように行ったのは、何か象徴的なような気がしております。

本日のまとめですが、ハルヒと春樹という最初の語呂合わせに戻りますが、村上春樹の作品と涼宮ハルヒ、どこでその二つがリンクするかということです。風景としては、先ほ

どの夙川であったり、甲山であったり、共通の視点で描かれた風景というのはもちろん作品のなかにあるわけですが、それだけではなくて、村上春樹の作品というのも、阪神・淡路大震災以後の阪神間というのは意外と見ないわけです。村上春樹が描いた阪神間は、あくまでも阪神・淡路大震災で失われてしまった思い出の阪神間なんです。作者の心のなかに生きている昔の阪神間を描いています。

もしご興味があれば、『海辺のカフカ』をもう一度お読みになって、神戸の描き方を読んでみてほしいんです。何かものすごく屈折したようなところを感じる、ものすごくきれいに描いていないんです。なんか神戸を避けているな、みたいなどころがあります。村上春樹が描いた失われた阪神間というイメージです。

一方では、涼宮ハルヒのなかに描かれた西宮、阪神間は、震災がなかった世界の西宮ではないかなと、それが私の仮説です。涼宮ハルヒが世界をつくり変えたときに、西宮は震災が来なかったことになっているのではないのかな。それは、先ほどの息子がポケモンの話をしたところから思い付いたわけです。震災がなかった世界を描いたのが、涼宮ハルヒかなとそんなことを考えていますが、そのへんはもう少し掘り下げていかないことには分かりませんが。

いま並べましたのは、昔の西宮球場とそれがなくなっただけの西宮ガーデンズの様子を出しています。

最後にぼんと出したこれは、ものすごく貴重な記事だと思います。これは実は、僕が自分で見つけた記事ではなくて、涼宮ハルヒの聖地巡礼のホームページとして有名なきーぼー堂というホームページがありますが、こちらで昔の記事の写真を掲載しておられたのをお借りしました。

なんと村上春樹と谷川流が同じコーナーに並んでいる。間に尼子騒兵衛さんも入っています。これは阪神間の有名な芸術系の人たちがずらっと並んでいる記事です。これをたどっていくと、いま兵庫県の広報ページにリンクがあって、実際その記事のPDF版を取ることができました。ちょっとこれは文学史のからみでないかなと思って、永久保存にしておいてほしいなと思います。村上春樹さんと谷川流さんが並んで載っているなんて、なかなかないと思いますので貴重なひとこまではないかと思います。

今日の講演は、村上春樹の世界と涼宮ハルヒの世界をいろいろ重ね合わせたり、どこでつながっているかみたいないろんな妄想を描いてみました。

ハルヒも宇宙を創造したことになっていますが、村上春樹の作品のなかにもいろんな別の宇宙が出てきます。『羊をめぐる冒険』のなかに、いとみみず宇宙というものが出てきてなかなか面白いのですが、この二人がなかなか、谷川流さんと村上春樹さんの描く世界は、結構近いものがあるのではないかというのが私の今日のお話したいことです。

これが本当に最後ですが、涼宮ハルヒの舞台を西宮市の方で観光コースにしようかなという話があるとかないとかいろんな説が飛び交っていますが、『神戸新聞』には、こんなふうに出ています。「西宮市観光振興グループはハルヒの人気に喜びながらも、市として西宮

を聖地として売り出すことはできないと慎重だ」と書いています。

一方では、市議会の定例会のバックナンバーを見ると、前向きに考えているみたいなそういう話もあると。そのへんのところは、流動的なのもかもしれませんが、せっかく『涼宮ハルヒの驚愕』が4年振りに発売されて、非常に話題になっているときでもあるので、西宮市が地元ということでいろいろイベントを立ち上げてくれたらいいのではないかしらと思っっています。

いまはゆるキャラブームで、全国各地で訳の分からないゆるキャラがいっぱい登場しています。西宮市が、どうでしょうか、角川さんと交渉して涼宮ハルヒの公式キャラクターをゲットしたら、これは世界に無敵のキャラクターだと思いますが。

もし涼宮ハルヒが駄目ならば、ぜひ村上春樹に交渉して羊男を西宮のキャラクターにゲットして……。

その方がもっと無理かもしれませんね。村上春樹さんに許可されないかもしれませんが。

そのように文学、アニメの方と地元で楽しむことができるのは、なかなか幸せなことだなと私なんかは思っています。ということで、時間が若干過ぎてしまいましたが、このへんで話は終わりたいと思います。本日はご清聴ありがとうございました。

また秋にも同じように西宮文学案内が引き続きあるので、またお越しただけたら幸いです。本日はどうもありがとうございました。

司会：土居豊先生、ありがとうございました。これより質疑応答の時間を。

土居：取っていいんですか。時間を超えちゃっていますが。

構わない？

では、べつにいいみたいなので、もしご質問があれば受けますが。

会場：大変参考になる話をありがとうございました。一つ涼宮ハルヒシリーズの方でのご質問ですが、今日のお話で原作者の谷川流先生が西宮北高校出身、関西学院大学出身と周知のことですが、なかなかあまり関西学院大学というのが前面に出てこないというお話がありました。ちょっとネタバレになりますが、最新刊の『涼宮ハルヒの驚愕』の最後では…

土居：待ってください、待ってください、それを果たして言っているものかどうか。おっしゃることはいまものすごく分かりました。知っているんです。言っているのかな。『涼宮ハルヒの驚愕』のなかに書いている、どうぞお続けください。

会場：ごく一部だけですが、関西学院大学とおぼしき描写がございます。

土居：出てきますね。

会場：私は文学を深く読むようなスキルはないので、読んでいる側からすると冗長じゃな

いかなと思いながらも、原作者として何らかのこれまでのところがずっと布石なのかなと思われませんが。作家の土居豊さんの感覚として、この描写は、本当にここで話すべきなのかは分かりませんが、言ったもの勝ちということもありましたので、ここでフランクに、あの描写はハルヒの世界として、高校時代で終わるのか、それとも大学生活を続けて書くつもりなのか、そのあたりの考察をひとことで結構なんです。

土居：僕が谷川流さんに成り代わって書くのであれば、ぜひ大学まで書きたいところです。あの涼宮ハルヒのシリーズは順番にちゃんと学年が上がっていっていきまして、このまま書き続けていくと卒業して進学するはずなんですよね。もし、そのシリーズがいまの倍ぐらい続いていくとすれば、当然大学編に入っていきますね。その方が面白いかなとは思いますが。多分作者としては、それも書きたいんじゃないかなと。僕なら書きたいです。ファンとして読みたいですね。

会場：ありがとうございます。私もそう思います。例えば、ちょっと突飛な話ですが、週刊少年ジャンプで『ドラゴンボール』や『キャプテン翼』みたいに、いきなりぽんと大学生編がある日突然始まるとか、ここにもし何かそういうことになれば、先生としては読みたいですか。

土居：ぜひ読みたいです。谷川流さんに、ぜひ描いてくださいとファンレターを送りましょうか。

会場：私もそういうことを期待しています。まだまだ続くこと、もっともっと西宮市が出てくるということを期待したいです。ありがとうございます。

土居：ありがとうございます。ほかにもございますでしょうか。よろしいでしょうか。また引き続き涼宮ハルヒも、また村上春樹の新刊も書いてほしいなと思っております。それではこのあたりで終わりますでしょうか。

司会：本日は素晴らしい講演をしていただきました土居豊先生、企画していただきました河内先生、本当にありがとうございました。お帰りの際はお忘れ物がないようにご確認をお願いします。

会場：ありがとうございました。

(終了)